

書評 高橋 敏『国定忠治と時代―読み書きと剣術』 ちくま文庫、2012年。

平尾 光司

今回の群馬県に地域調査に参加して興味を持った一つのポイントは、高崎競馬、伊勢崎競輪、桐生競艇などの公営ギャンブルの盛況と三共、平和などのパチンコ機器メーカーの存在である。

パチンコ機器の生産は名古屋が発祥の地であった。しかし現在では群馬県桐生が圧倒的なシェアを誇っている。上州人のギャンブル好きは有名であるがその歴史をたどると江戸後期の国定忠治に代表されるアウトロー集団の博打の盛行に行きつく。

1930年代生まれの我が世代では国定忠治は東海林太郎の直立不動で歌う「赤城の子守歌」の主人公として、素人の村芝居に主役として身近な存在であった。

今回の社研に群馬地域調査でこの問題に関心を持って参加したが適切な資料がなく困っていたが本書は千天の慈雨であった。

著者は近世村落社会の研究の第一人者で群馬大学に在職中に上毛地方の地方文書を読み込み、国定忠治ゆかりの地のフィールド調査を展開した。専修大学文学部の故青木美智男教授の共同研究者でもある。ちなみに本書の解説は青木教授が担当されている。

本書の構成は序章 蚕繁盛の国、1章 国定忠治の周辺、2章 民衆の読み書き、3章 もう一つの近世社会となっている。

序章では養蚕によって上州が豊かになっていったプロセスを紹介する。上州は自然環境から水田に恵まれず米が食べれず蕎麦やうどんが常食とする畑作の中心で貧農地帯であった。それが江戸中期に養蚕の解禁によって豊かな農村になっていく。その要因は年貢取り立てが石高制のもと米が中心で水田農家にきびしかったのに対して畑作には検地の縄延びなど年貢は比較的緩やかであったところに蚕という商品作物が導入されたことである。これが上州の近世村落社会に大きなインパクトをもたらした。自給自足の農村経済から市場経済社会への転換である。農家にとって養蚕は蚕種の購入、餌の桑の葉の調達から繭の販売まで経済的な才覚が必要になる。さらに繭の加工、絹糸の生産は絹織物産業の発達をもたらす。

第1章「国定忠治とその周辺」では江戸時代中期以降の博徒・やくざ集団の形成のプロセスを商品経済の発展との関連で捉える。兵農分離の封建的身分社会が崩れアウトロー的な武闘集団のリーダーとしての忠治の武器感覚と実力を明らかにする。特に北関東の農民武術の本間念流の盛行に触れる。武闘だけでなく忠治の読み書き能力の高さとそれを身に着けた筆子中（寺小屋）教育を紹介する。

そして第3章では忠治の世界を近世農村社会の変化の諸相からとらえる。上州の女たちで「かかあ天下」の具体例が地方文書の渉猟から浮かび上がらせる。村の恋愛・結婚が大家族から小家族に転換する家族制度の変質し、養蚕の発達が女性の地位の向上、自立をもたらす過程が明らかになる。

第4章では生糸商いで資産を蓄積した問屋・大商人と農民の対立・緊張関係が一揆、打ちこわしなどと落文、張り紙、火札など庶民の抵抗のメッセージが紹介される。

最終章では近世末期の農民武術の主流で現代にもつながる馬庭念流の歴史と農民の関わりが豊富な地方文書の紹介で明らかにしていく。

本書は幕藩体制の崩壊への社会・経済的な過程を国定忠治という伝説的なアウトローの人物像、庶民の息使いと生態を通じて見事に描き出している。

群馬調査の基本資料として楽しく有益な文献として紹介しておきたい。